

SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム (社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築) 開会挨拶、プログラム説明

2021年度 公開オンラインセミナー/募集説明会
2021 年 7 月1日

プログラム総括(社会的孤立枠担当) 浦 光博

SDGsと社会的孤立・孤独

■ SDG s の基本理念

目標とターゲットがすべての国、すべての人々、及びすべての部分で満たされるよう、**誰一人取り残さない**（2015年国連総会）



社会的孤立・孤独問題の解決は、
SDGsの出発点であり、終着点でもある

■ 無関心が孤立・孤独を生む

- 孤立の不可視性
- 可視化、予防の重要性

背景

■ 集団の結びつきの希薄化と個人化・自己責任論

血縁・地縁を基盤とする生活→近代化 伝統的なつながりからの解放

→個人を守ってきた集団の結びつきが希薄化

多くのことが個人の選択に委ねられ、その結果は自己責任のもとに帰される

■ 様々な社会構造の変化に直面している日本

少子高齢化、核家族化などによる世帯規模の縮小、都市的生活様式の浸透、
経済のグローバル化の進展、経済の低成長化等による非正規雇用の労働者の増加



社会的孤立・孤独
社会問題として顕在化

▲ 直接的・間接的な影響により、心身の健康悪化、孤立死や自殺といった深刻な事態が生じる

▲ 多くの人びとが孤立し互いに関心を向け合うことが少ない社会では社会規範の弱体化が進み、逸脱行動が増加、犯罪被害リスクも高まる

課題

- ▲見えにくいこと、**不可視性**
(新型コロナウイルス感染症の流行を受けた対面による接触の減少により加速)
- ▲社会構造の変化により制度の狭間に陥り従来の**見守り活動や支援制度から外れる人の増加**
- ▲当事者に対する**短期的・応急処置的な施策**
- ▲**再現性**のある施策を開発・実装するための**方法論の不足**
- ▲就学者数や就労者数など、**既存の社会規範**に基づいて決められた目標により、当事者本人が**納得できず社会とのつながりを再び失う**
- ▲当事者の**自己責任論**
- ▲**個人情報保護やプライバシー等に配慮した当事者の情報の取り扱い**

課題

- ▲ **孤立が生じうる社会は、半ば我々が望んだ社会**
しがらみから解放され、自由とプライバシーが守られる社会
→ 孤立を防ぐために**かつての社会**に戻るのか
- ▲ **地域特性の多様性**
かつての社会？
→ 現代社会においても、地域特性は多様
- ▲ **孤立の重層性**
強く結びついた家族が地域コミュニティ内で孤立している
→ 児童虐待、DVの不可視化
強く結びついた地域が社会の中で孤立している
→ 地域内の問題の不可視化

新型コロナウイルス感染症の社会的影響

新しい状況下での社会的孤立・孤独メカニズム

- 個人間の物理的な距離の確保⇒
これまで特段、社会的孤立・孤独リスクが高いと考えられていなかった状況にある人々も、社会的孤立・孤独に陥る可能性が生じる
- 新型コロナウイルス感染症の流行を契機として、オンライン化が進行し、人と人との信頼関係や合意形成のあり方が変わる中で、**具体的にどういった層において、どのように社会的孤立・孤独の状況に陥る者が増えているのか**、新しい状況下での社会的孤立・孤独メカニズムを検証し、予防につなげる必要がある

本プログラムにおける社会的孤立・孤独の予防

- 孤立する主体の環境や状況に関連する情報から
孤立状態を可視化して測定し、これに基づき**望まない孤立を解決**
リスクを指標化し、孤立状態に至る前の段階で**予防**
- 目標とするのは・・・
社会としての、孤立を生まない多様なつながり・ネットワークの構築/
孤立してしまう主体にとっての、多様なつながり・ネットワークの構築
- **社会的孤立を主軸**におきつつ、孤独や社会的排除、あるいは幸福度やウェルビーイングといった関連する概念も含めた**多角的な視点**で研究開発を推進
- **望まれた孤立**にどう向き合うか
→より多角的な視点が必要

人文・社会科学の知見の活用と社会課題解決型の研究開発

- 人々の行動・心理・社会的背景の分析、さらには、社会的孤立・孤独とは何を意味し、そのこういった側面が問題であるかを精査するための歴史、哲学、人類学的な検討や、国際比較による社会的孤立・孤独を生む日本社会の特質の検証など、**幅広い人文・社会科学分野の知見も活用した根源的なアプローチ**
- 社会的孤立・孤独を生むメカニズムの解明にとどまらず、各分野での個別の取り組みに横串を通し、**戦略的な施策の開発・実装につなげる、社会課題解決型の研究開発を推進**

SOLVE for SDGs 社会的孤立枠

SDGsの達成に向けた
共創的研究開発プログラム
(SOLVE for SDGs)



2019年度～ シナリオ創出フェーズ・ソリューション創出フェーズ

「社会的孤立・孤独の予防」に限らず、地域が抱える具体的な社会課題に対して、研究代表者と地域で実際の課題解決にあたる協働実施者が共同で、既存の技術シーズの活用による解決策（事業構想、事業計画等）を創出していくことを目指します。

（社会課題の解決のために活用する技術シーズがすでにあることが必須条件となります）

NEW!!

2021年度～ 社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築（社会的孤立枠）

「社会的孤立・孤独の予防」に関する研究開発であり、その要因やメカニズム理解、新しい社会像の描出といった人文・社会科学などの知見を使った学術的な研究から、社会的孤立・孤独リスクの可視化・評価手法（指標等）、社会的孤立・孤独の予防施策の開発とそのPoC（Proof of Concept:概念実証）までを、国内の特定地域や、学校、職場、コミュニティなどの施策現場と協働して一体的に実施します。

なお、2021年度は、新型コロナウイルス感染症の社会的影響を踏まえた提案を募集します。

プログラム目標

- 人口減少・少子高齢化、経済変動、新興感染症による影響など、様々な社会構造の変化を踏まえ、社会的孤立・孤独のメカニズムを明らかにすると共に、社会的孤立・孤独を生まない社会像を描出し、人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化や評価手法（指標等）、社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組みの研究開発を推進。
- その際、開発した評価手法（指標等）に基づいた、社会的孤立・孤独の予防施策の効果検証を含め、PoC（Proof of Concept：概念実証）までを一体的に行う。
- 本プログラムの実施を通して、人・組織・コミュニティ間の多様な社会的つながり・ネットワークを実現し、社会的孤立・孤独を生まない社会の創出を目指す。

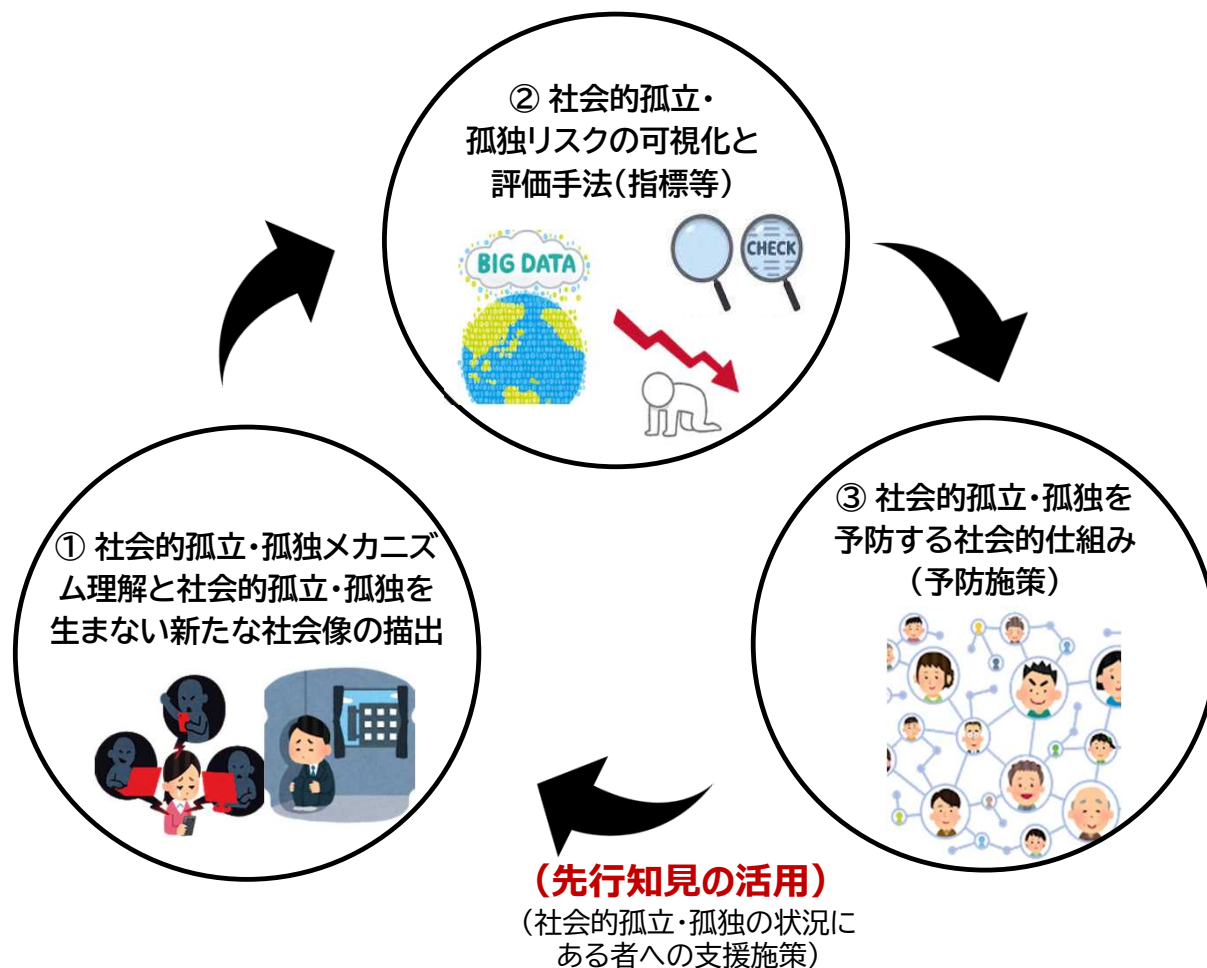
2021年度は、全ての提案について新型コロナウイルス感染症（COVID-19） の社会的影響を踏まえたものを募集

想定外の物理的な分断への対応が迅速かつ十分でないあらゆる場面で、社会的孤立・孤独の顕在化・深刻化。これまで社会的孤立・孤独から無縁だった人や集団も社会的孤立・孤独に陥るリスクが高まっている。



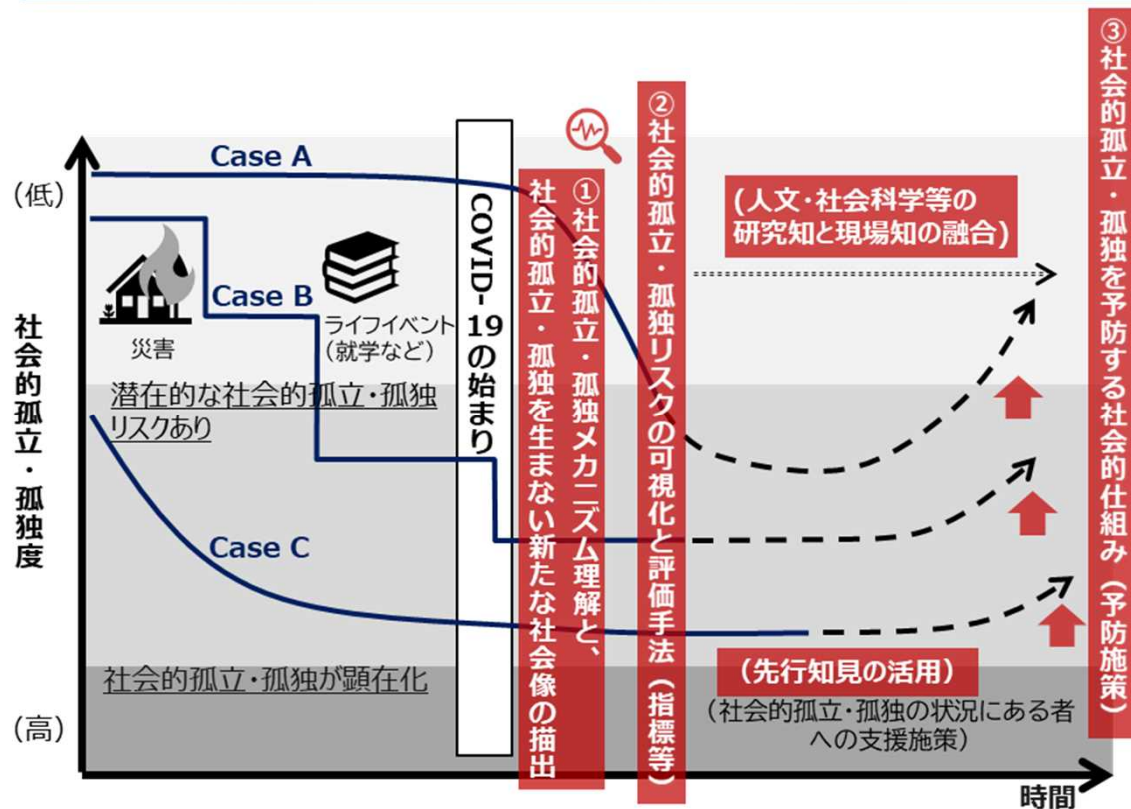
ウィズコロナ・ポストコロナの社会における望ましいつながり・ネットワークのあり方を追求し、これを積極的に構築していく必要がある。

研究開発要素①②③の一体的推進 (1)



- 様々な社会構造の変化を踏まえ、人文・社会科学の知見も活用し、社会のメカニズム理解にまで掘り下げた研究開発が必要なものを対象
- 研究開発要素①②③の一体的推進と、施策現場での**PoC (Proof of Concept : 概念実証)**まで実施
- 概念的な研究に留まることがないように、**国内の特定地域や、学校、職場、コミュニティなどの施策現場と協働**
- 既存の施策の評価等を通じた研究知と現場知の相互作用の促進
- 様々な種類の社会的孤立・孤独の横断的・俯瞰的分析
- ICTや芸術分野など、異分野との融合的な取組の積極的な推進

研究開発要素①②③の一体的推進 (2)



① 社会的孤立・孤独メカニズム理解と、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像の描出

人や集団の行動、心理、社会的背景の検証から、どのようなメカニズムによって社会的孤立・孤独が生じるのか、社会的孤立・孤独の状況にある者の視点も考慮した社会のあり方を分析します。その結果を基に、予防すべき社会的孤立・孤独を明確にすると共に、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像を描出します。

② 社会的孤立・孤独リスクの可視化と評価手法 (指標等) の開発

①で描いた社会像の実現に向け、まず人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクを早期にとらえるための可視化や評価手法 (指標等) を研究開発します。

③ 社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み

社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み (予防施策) を開発し、②で開発した社会的孤立・孤独リスクの可視化・評価手法 (指標等) に基づいた**評価・実証を、国内の特定地域や、学校、職場、コミュニティなどを対象に行います。**

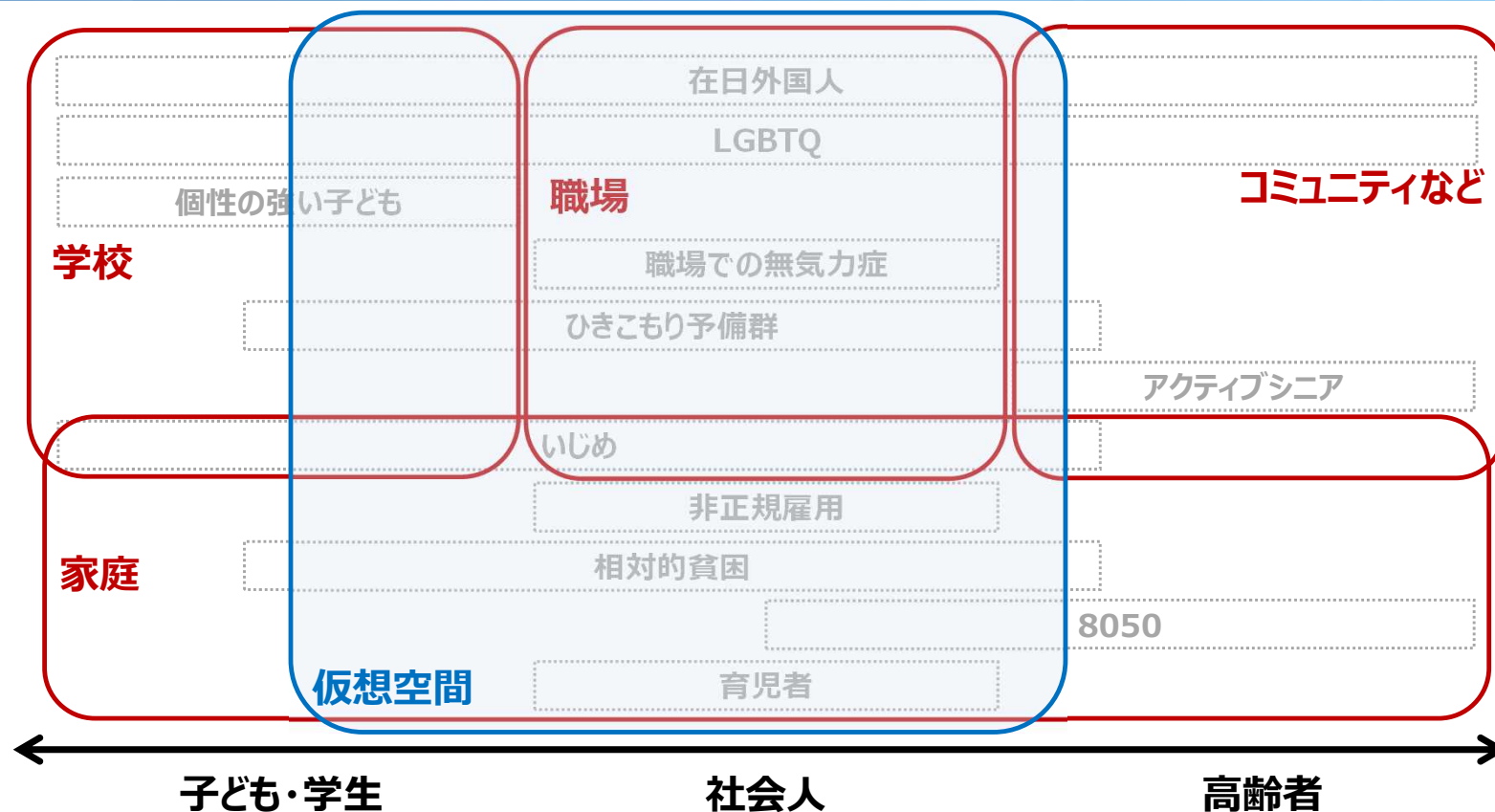
Case A: 社会的孤立・孤独とは無縁だったが、COVID-19をきっかけに社会的孤立・孤独リスク増加

Case B: 災害/ライフイベントをきっかけに社会的孤立・孤独リスクが徐々に増加し、COVID-19より更に悪化

Case C: 所与の環境・障害により、例えば幼少期から社会的孤立・孤独リスク高

「厚生労働省、社会的排除にいたるプロセス～若年ケース・スタディから見る排除の過程～概要 (内閣官房/内閣府提出資料)、第8回社会保障審議会生活困窮者の生活支援の在り方に関する特別部会資料 (平成24年9月28日)」を参考に、RISTEXにて作成

本プログラムにおける課題例ポートフォリオ



本プログラムにおいては、すでに顕在化している社会的孤立・孤独に係る先行知見も活用しながら、横断的な観点から社会的孤立・孤独の予防施策の実現を目指す。なお、本図に記載されていない社会的孤立・孤独に関する提案や、本図とは異なる視点での提案も十分想定される。

提案および研究開発にあたっての留意事項

- 研究開発要素①②③を一体的に実施するためには、研究側と施策現場側の乖離を埋めて、研究と実践を同時進行し、**施策現場から得られた様々な知見を、制度・社会デザインにつなげていく社会実装のための研究**が必要です。そのため、本格研究開発開始時までには、研究側、施策現場側（研究成果の利用者）双方がプロジェクトに参加することが望まれます。
- 人文・社会科学と自然科学の分野横断的な知見や、顕在化した孤立者への支援施策等に係る先行知見を活用し、ハード・ソフト両面からの包括的、総合的な研究開発を促進することを期待します。
- **研究開発の終了後も発展的な取組が継続的に行われる**ために、地方自治体、NPO、教育機関などの関係機関との連携を研究開発の初期の段階から十分に行うことが重要です。
- 研究対象、研究の手法や前提条件、技術開発におけるデザインなど、研究開発のあらゆる側面において**ジェンダーをはじめダイバーシティ**の視点に配慮することとします。
- 本プログラムの掲げる課題は国内のみにとどまらず、現在・将来的に海外も同様な課題があることから、**海外の知見・フィールド・人的資源の活用など海外との協働**を対象とした提案も推奨します。ただし、開発した社会的孤立・孤独の予防のための社会的仕組みは国内の特定地域や、学校、職場、コミュニティなどの施策現場で実証する必要があります。

プログラムのマネジメント体制

プログラム総括

■ 浦 光博

(追手門学院大学 教授)



プログラムアドバイザー

(五十音順)

■ 有末 賢

(亜細亜大学 都市創造学部 教授)

■ 石井 光太

(作家)

■ 稲葉 陽二

(元 日本大学 法学部 教授)

■ 岩田 正美

(日本女子大学 名誉教授)

■ 工藤 啓

(認定特定非営利活動法人育て上げネット 理事長)

■ 平田 オリザ

(芸術文化観光専門職大学 学長)

■ 藤原 佳典

(東京都健康長寿医療センター研究所

社会参加と地域保健研究研究チーム チームリーダー)

※R3年6月時点
今後アドバイザーを追加予定

プログラムの全体的な活動

- 採択したプロジェクト間の交流や連携、相互作用を促進する各種企画、プロジェクトを横断・俯瞰する内外関係者との議論の場の設定（合宿/全体会議等）
- 研究開発成果のアウトリーチ活動（成果報告会やWebなどでの情報発信等）

その他、本プログラムでは以下のような活動の実施も予定しています。

新しい社会像の実現に向けた構想の策定、施策現場との接続などの体制構築を促進するために、社会的孤立・孤独に係る多様な専門性や、社会的孤立・孤独の特徴を熟知した施策開発/運用の経験者からなるマネジメント体制により、プロジェクトに対する構想策定への助言、体制強化等を図るための**人文・社会科学研究と施策現場のマッチングやプロジェクトを育てる伴走支援機能**を提供します。

本プログラムのリサーチ・クエスチョンを設定し、社会的孤立・孤独の全実施期間を通して、マネジメントグループ、プロジェクト、外部有識者、成果の受け手・担い手等とプロジェクト横断的に議論を行い、随時問いと答えを見直していきます。

ご静聴ありがとうございました。

※公募・プログラムについての詳細は、本日この後の募集説明会で
RISTEX事務局よりご説明いたします。

公募問い合わせ先 : boshu-koritsu@jst.go.jp
SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
「社会的孤立枠」募集担当
(科学技術振興機構 社会技術研究開発センター)